

老いの「みずみずしさ」考

久保田 美 法[※]

近年、サクセスフルエイジングやプロダクティブエイジングなどの研究が興隆し、加齢の肯定的側面に関する研究が増えているが、私たちの社会には「若さという神話」が根強くあり、老いを真に肯定することは、なかなか難しい。本稿では、高齢女性のいくつかのつぶやきと、80代女性の語りを通して、若いままであるとか、成熟した姿とはまた異なる、老いの「みずみずしい」姿を捉えた。語りからは、長い年月を生き抜き、死というものを身近に感じているからこそ、多くの喪失を当然のことと見据えながら、生への希求もまた日々湧きあがること、老年期とは単なる終着点ではなく、まさに生の途上にあるものであることがみてとれた。本稿の題目である「老いの『みずみずしさ』」は、逆説的で不思議な表現に思えるが、これも老いの一つの真実であり、一つの捉え方として意義があるものと考えられる。

キーワード：老いのパラドックス、若さという神話、いのちの営み

“歳は六十でも心は十八という言葉がでてくるのは、
命というのが自ら咲こうとしているから”

(石牟礼, 1995 : 170)

はじめに

筆者が大学院で担当している「高齢者心理学特論」で、ある高齢女性の語りを紹介した時のことである。「みずみずしい」という感想が何人かの受講者から聞かれた。そこには、何十年前の出来事も「色鮮やか」に語られていたことへの驚きがあり、また素朴に“年を重ねた女性の語りとは思えない（もっと若い人かと思った）”という感触があったようにも思われたが、「みずみずしい」という表現は、「若々しい」という言葉と似ているようで、何か違うようにも思われた。

※ 淑徳大学大学院総合福祉研究科 総合福祉学部専任講師

その語りは、筆者がかつて修士論文作成時に、自宅に暮らす80代の女性を月に一度訪ねてお聴きしたもので、ご主人を亡くされて半年あまりだったその女性は、介護の日々について、夫について、子どもについて、若い頃のこと、ご自身の身体のこと、年を重ねた現在の心境等々を流れるように語られ、その語りに魅せられた当時の筆者は、そこに「華やぎともう一つの何か」をみた。その時筆者が感じていた「華やぎ」と、院生がもらした「みずみずしい」という感想は、一脈通じているようにも思われたが、「みずみずしい」という表現に、あらためて目を覚まされる思いがした。

「みずみずしい」とは、「みずみずしい若葉」「みずみずしい乙女」「みずみずしい感性」などと言われるように、「光沢があって生気に満ちている。新鮮で美しい」（広辞苑第六版）という意味である。一方、「老いる」という言葉は「年よる。年とる。またその結果、心身が衰える。植物などが衰える。弱る。枯れかかる」（広辞苑第六版）という意味であり、また「枯れる」とは、「①水が自然に減って乾燥状態になる。②若さ・豊かさ・うるおいがなくなる。③植物の生活機能が失われる。草木の命が終わる」（広辞苑第六版）ことである。

もちろん老いることは「衰える」ことのみを指すわけではない。様々な人生経験により蓄えられた「知恵」や、年を重ねたからこそ得られる「成熟」というものもある。しかし「成熟した」輝きは、芽吹いた頃の「みずみずしさ」とは異なるものだ。「みずみずしい」は、「老いる」とことと、基本的には相反するように思われる。

免疫学者の多田（1987：100）は、老いとは「不規則で不連続な多重構造」をもつもので、それを理解するには、「生物というものが規則的で連続的な被造物であるという思想を捨てる」必要があると指摘し、これを受けて河合（1997：282）は、老いというものは「そのなかに多くのパラドックスを含む」と述べている。高齢女性の語りに「みずみずしさ」が感じられたのも、そうした「老いのパラドックス」の一つの表れとも考えられる。

近年、医療や美容の分野では「アンチエイジング（抗老化）」という、加齢に伴う生物学的プロセスに介入を行い、健康長寿をめざす研究がさかんに行われている。しかし、先述の「みずみずしさ」は、「老い」に相反する概念のようでありながら、「老い」に対抗する感じは薄い。むしろ、「アンチ」という言葉に感じられるような力は抜けて、不思議と対立せずにあるような印象をもつ。この不思議な感じは一体何だろうか？

「老い」の中にもみずみずしさがあるとすれば、それを生み出しているものは何か。それは「老い」を生きている人、これから生きていく者にとって、どのような意味があるのか。「老い」を捉える一つの視点として、「老い」ならでは「みずみずしさ」について考えてみたい。

1 若さという神話

老年期の捉え方には諸説あるが、進藤（1998：289-290）は「片やそれを衰退と無価値化の時

と見る、片や円熟と悟りの時と見るなどで、老年期のイメージは二極分解しがちなようだ」と述べ、さらに「意地悪な見方をすれば、円熟や知恵を強調するのも、老人無価値観へのこだわりから生ずる一種の反動形成ではないか」と指摘している。

私たちの社会には「『若さという神話』の無意識の強制」（春日 2011：8-9）がある。「お若いですね」という言葉が、ほめ言葉として使われるのも、「若いことは価値あること、むしろ、若いことはよいこと」という意識が互いに共有されているからである（井上 1998：15）。

社会における高齢化の諸問題に対して学際的に取り組んでいる老年学の領域では、1980年代以降「衰退し、排除される対象としての高齢者観」から「成長と自己実現の可能性をはらんだ高齢者観」へパラダイムをシフトさせ、高齢者心理学の領域でも、精神機能の測定方法の改善により、加齢に伴う衰えだけでなく、保持や伸展の様態が観察されたり、また老いや病にかかわらず補償的に発揮される高齢者の適応力も発見されるようになってきた（進藤 2010：29-30）。

また長生きすることが珍しかった時代、「不老不死」や「不老長寿」は人々の夢であったが、現実には「大衆長命」の時代が到来すると、老化や死に対する観念はサクセスフル・エイジングに到達した（小田 1993：2-3）。サクセスフル・エイジングとは、「不老」を否定するところから出発し、いかに社会に適応し、よりよく幸せに老いていくかを問おうとする概念である。しかしサクセスフル・エイジングには、加齢に伴う心身の様々な変化を予想して自ら対策を立て、生活習慣を制御したりすることが、結果として「良い老い」を実現することになるという考え方がある（佐藤 2014：56）。

このように「老い」の否定的な面だけでなく、肯定的な面が様々な研究によって明らかにされてきたことには、確かに意義があるだろう。しかし予想や対策によって、老いても、何とかして“既知の肯定的なもの”を見出すことのみに安心のありかを見ようとしているとすれば、そこに先述の「一種の反動形成」（進藤 1998：290）はやはり働いているのではないだろうか。

そもそも「肯定的な老年観」とは何なのか。鷺田（2007：265）は「〈老い〉がまるで『問題』のようにしか語られないのは、社会の仕組みがいまだどこか『生産主義』と『成長神話』のなかでかたちづくられたままになっているからであり、『生産』と『成長』にいちばんなじみにくいのが〈老い〉というもの」と指摘している。「サクセスフル」という呼称にも、「生産主義」や「成長神話」の影響が色濃く感じられる。老いを真に「肯定」するには、そうした「生産」「成長」のみをよしとする価値観自体の転換が必要であると考えられる。

中嶋・小田（2003：304）は、「サクセスフル・エイジングのもう一つの観点」として、高齢期における生活満足の問題を「高齢期以前の物質主義的で合理的な観点」から「宇宙的かつ超越的な観点への変化」として捉えようとするL. Tornstamの「ジェロトランセンデンス（老年的超越）理論」を挙げている。自分のことを宇宙や自然の一部として認識し充足する在り方は、確かに老いにまつわる「価値の転換」として重要だろう。しかし「老年的超越」という表現は、どこか大

層にも思われる。実際にそうした高齢者は存在するが、そうした姿は、それほど仰々しくは見えず、むしろもっとさりげないものではなかろうか。

山中（2002：446）は、宗教、哲学、創造性など「高齢者のみならず誰にとっても大問題であるところのこと」と、「日常茶飯の、他人にとってはどうでもいいと思われるような、ほんの些細なこと」——そこにこそ真実が宿ると山中（2002：446）は書き添えているが——そうした「誰にでも成り立つ問題が、高齢者臨床においても通常の地平において語り得ること」こそ、高齢者臨床の中核（これを山中はCure、Careと対比させてCoreと呼んでいる）に至る王道であるとしている。しかし「そうした次元においても何の分け隔てなく論じることができる」（山中2002：446）道のりは、未だ遠い。日常の何気ない「老い」の姿に潜む「真実」を、私たちはどのように受けとることができるであろうか。

2 「老い」が若さを求める時

前節の「若さという神話」は、精神科医の春日（2011）が「年をとりそこねる老人たち」と出会う中で捉えたものであった。前向きで澁刺として、笑みを絶やさずに常に頑張るという、キラキラした若さを装うことは自己肯定につながる。初老期を迎えた者が若作りをしたがるのは、他人を欺く前にまず自分を欺きたいからだ、と春日（2011：8-9）は指摘する。また「社会の否定的な老年観と高齢者自身の否定的な老性自覚が一致してしまうこと」は、「高齢者の活力を奪う心理的な源泉」（佐藤、2014：16）になってしまうという問題もある。

とはいえ、高齢者が若さを求めるのは、そうした社会的な意味あいだけだろうか。また、自身が「老いた」という自覚は、否定的ないし肯定的なものに大別されるのだろうか。高齢者の目に若さはどのように映っているのか。筆者が通っていた高齢者病棟で出会い、考えさせられたエピソードから考えてみたい。

ある日、病棟の廊下で通り過ぎりの車椅子の女性に声をかけられた。

「けんこ、けんこ。あんたは、けんこ」

「けんこ」は「健康」のことかと思われた。健康であることを特に“いいね”と言われた様子ではなく、ただそのまま言われたようでもあったが、しかしなぜ「あんたは」とわざわざそのような声かけをされたのか。決して責められているわけではないが、それだけに、どこか申し訳ないような、何とも言えない気持ちになった。

また同じ病棟で出会った90代の凛とした美しい女性とはこんな会話が合った。

「歯、家に置いてきた。昔はべっぴんだった。」

〈歯、つけてなくてもべっぴん〉

「でもつけて会いたい。あなた若いね。70歳？」

「置いてきた」と言われる「歯」は、入れ歯のことかと思われた。〈つけてなくても、べっぴん〉は、その時の筆者の偽らざる気持ちではあったが、「でもつけて会いたい」の「でも」という言葉に、女性としての矜持をみる思いがした。また、90代のこの女性からすれば「70歳」は「若い」かもしれないが、30代だった筆者の年齢をご自分に引き寄せてみせることで、若さへの気概をみせられたようにも思われた。

「歯」については、この他、いくつか印象的な出会いがある。また別の女性であるが、同じ高齢者病棟で、こんなことを言われた方もあった。

「それ自分の歯？へえ！ 私にもちょうだい！」

あるいは、また別の時、このように言われた女性もあった。

「きれいな髪ですね。歯も。それ、全部取って、私にくれる？（笑）」

筆者の歯や髪を、まるで髪や入れ歯であるかのように「取って」「ちょうだい」という表現は、冗談のようでありながら、生々しく切実な思いも感じられた。もちろん、それは現実には不可能であるし、そのことを認識されていないという様子ではなかった。いや、むしろそのことをよく知っておられたからこそ、冗談のように言ってみたくもなられたのかもしれない。と同時に、当然付け替えが可能であるかのような言い方は、一瞬、“筆者の髪や歯は取りはずせるものだったか”と錯覚するような、本当にその手が伸びてきて「全部」取って、ご自分にはめられるのではないかと思わせるような迫力もどこかにあった。

また“こんな歯の人がいるなんて！”“あんたは入れ歯じゃないの！”とでもいうような「へえっ！」という驚き方には、「若いね。70歳？」と言われた先の女性のように、筆者を同輩と見立てていたような感触もあった。そこには、“あなたも私と変わらないでしょ”，“(だから)ちょっと（貸して）くれたっていいじゃない”というような、そもそも“その歯も髪も、あなたに絶対的に属しているものなどではない”という思いが潜んでいたようにも思われた。確かに“同輩”であり“借り物”なら、譲ることがあってもよいだろう。そこには、今は若く健康で、それが当たり前と思っている者も、それは一時的で移りゆくものだという醒めたまなざしもあったように思われる。冗談めいた言葉には、筆者へのからかいや皮肉も、いくらか混ざっていたのかもしれない。

また、少し離れたところにいた若い女性スタッフに目をやられ、こんな言葉をつぶやかれた女性もいた。

「あの中に入りたい。入れないけどね。」

「あの中」とは、あの「若い身体の中」ということかと思われた。これは「歯」や「髪」を付け替えるよりもさらに踏み込んで、身体そのものを取り替えるということだろうか。いや、先に挙げた女性たちの場合も、「歯」や「髪」は、若さや健康の象徴¹⁾であって、それを「取る」ことは、全てを取ることに等しかったとも考えられる。

むしろ「あの中に入りたい」と言われた女性の場合、いわば中身だけがその身体から抜け出て、新しいものに「入りたい」と言われたことの方が特徴的だろう。そこでは身体は、自分の身を包む「入れ物」や「容器」とされていたようにも思われる。

若者という存在は、年を重ねた人からすれば、ただそこにいるだけで、身体全体から生気を放っていると見える面もあるのかもしれない（「けんこ、けんこ」と言われた先の女性の言葉にも、これと通じるところがあったとも考えられる）。

「あの中に入りたい」という言葉は、文字通り、若い身体を自分のもの（入れ物）としたいという意味だったのか、あるいはその体内に入ることで、赤子のようにすっぽりとくるまれる安らぎを求めておられたのか。しかし、この女性は、そのすぐ後には「入れないけどね」とも言われている。

このように、若さを相対化する醒めたまなざしを、若者にもご自身にも向けながらもなお、時に恥じらい、時に自嘲しつつ、若く健康な身体を欲する思いは、どこから来るのだろうか？

3 「いのち」のつながり

「あの中に入りたい」という言葉で連想されたのが、村田喜代子の小説「蕨野行」（1994）である。これは、棄老伝説に想を取りながら、野に棄てられた老人たちが、座してただ死を待つ姿ではなく、次第に力を合わせて不思議な共同体をつくり、自ら野の草や川の魚を取って逞しく生きのびようとしていく様を描いたものである。作家の辺見（1998：229, 234）は、その解説で「姨捨を単にネガティブな民俗的記録としてとらえるのではなく、かつてあり、いまま実質上あるかもしれない、この先もきっとあるであろう、人の世のしょうことない『普遍』の一つと洞察する作家の強靱な心構え」を見てとり、「何人も見たことのない、このかりそめの老人共同体の成員に、どうあってほしいと願うか、人としてのなにを託すべきかが、この小説が真っ向から取り組んだ問題の一つ」と指摘している。

小説は、「野入り」した主人公のレンと、そのレンを慕う嫁のヌイの間に交わされる心の対話を中心に、この作家オリジナルのものと思われる方言のような古文のような独特の文体で紡がれている。

ある晩、レンは夢の中で、息子の先妻の亡児・長太郎に伴われて、子を見ごもりながらも凶作の中で産むべきか悩んでいるヌイの元に行く。長太郎の言うには、ヌイのお腹に宿っているのはレンであり、まずレンがヌイの子として生まれ、その次に長太郎がヌイから生まれることになったのだ、というのである。以下は、その夢の場面におけるレンの述懐である。

そのときおれの目はふとヌイの胸元に吸い寄せられた。その豊かに膨らんで有る、胸襟の下の乳房にむらむらと目が吸いついた。野入りしてのちの永え飢えを、その乳房を含みて満たしとうなった。温かえヌイの乳汁の味がおらの口中に溢れ、喉は鳴るごとくして唾をゴクリと呑んだ。まだおれはこの世の者にしてヌイは嫁なりつるが、おれの心地はすでに赤子のようになりてヌイの乳を恋うたよ。

(中略)

長太郎はくれぐれも我ら二人を生むよにヌイにしつこく念押しをせる。そして、今や乳恋うて喉を鳴らすおれを示し、

「されば、こいつをまず生むべし。生むべし」

と呪文のごとくヌイに申したる。おれは彼の声に誘われるごとく、その声に和して言うた。

「生むべし、生むべし」

小説のラストは、レンと仲間のトセの二人が息をひきとった朝のシーンである。

鳥の鳴声が外に流れ、雪晴れの朝が参りたる気配せる。ムシロの外からは眩しい暁の条光が射しこんだやち。

おれはその光を見るなり、

「おう、ヌイのもとへ行こう」

と、引きつけられるようにおもうた。

見ればかたわらでトセもゆっくりと音も無えでワラを脱ぎ、立ち上がりたる。その姿がかげろうのごとく透けていた。そこで自分の体もまじまじと眺めれば、同じように透けて有るなり。さればようやく死に着けるかと、しみじみ納得したる。体を動かし、手を振り、足を振れば、嘘のように楽々と動いた。

「トセよ。身が軽うなったか」

「おう、おう。軽うなった。やっと現世の務め果たしつろうか。今はふわふわと雲のような心地せるよ」

二人で言い合うて見下ろせば、人とも見えぬ瘦せさらばえたおれとトセの亡骸が、ワラの中に残りて有りつる。今までこのよな五体に入りて有ったかと、寒々とした気持ちせるなり。

(中略)

これで二人の身の振り方も決まりたれば、右と左へ別れて行くことになった。トセはにっこり笑うて、
「レンよ、まことに身は軽くなったのう」

と目を輝かせる。

「おうよ。飛ぶよに軽くなった」

「若えときのよに軽くなったのう」

「おうよ。嫁のときのよに楽しからん」

「おめとは幼なえときよりの、永えつき合いで有りつれば、またいつか会う縁も有ろう。さればここで
別れんか、さらばよ」

とトセが手をあげた。

「さらばよ」

と、おれも手をあげたなり。

さて、ヌイの腹へ入りぬるか、とおれはつぶやいた。そしてあの女子の乳を飲もうと渴くよにおもうた。

ヌイよ、ヌイよ、とおれは今はただ、母となる者の乳を恋うて夢のように、一心に、歩いた。

この言葉で、小説は終わる。

ヌイのお腹への歩みの途中で、レンの意識は次第に薄れ、ヌイのお腹に入った時にはもうレンとしての意識はすっかり消えているかもしれない。そのように、レンから赤子へと、二つの命が溶けあい、レンの命は受け渡され、新しく生きていくのだろう。この小説を読んでいると、十分に生きつくした命が新しい別の身体に「吸い寄せられ」「引きつけられ」生まれ変わるというのは、ごく自然なことのようにも思われる

しかし、これはあくまで小説であって、現実とは無関係のことなのだろうか。辺見（1998：234, 236）は、「『蕨野行』は古きを語っているようでいて、そのじつ、人の未来に向いているようにも私には思える」「二度とは生まれないであろうこの卓越した作品によって私がしばしば誘われたのは、既視の世界ではなくして、生と死とがめぐりめぐる無限の予知夢だったのかもしれない」と述べている。

レンは亡くなる前にもすでに、夢の中で赤子となっていた。前節の「あの中に入りたい」と言った女性は、目覚めた状態であり、“現在の自分のままで”というところが異なるかもしれない。しかし、その願いは、どこかレンの道行きに連なるところはないだろうか。

前節の女性たちの言葉はいずれも率直であり、筆者はいくらかうろたえつつも、嫌な感覚をおぼえることはなかった。彼女たちの言葉は、若者への生々しい嫉妬や羨望にもみえ、時に自然の流れに逆行してでも欲するという強い思いも含まれていたと推察される。しかし、長い年月を生き抜き、だからこそ、顧みれば「今までこのよな五体に入りて有ったかと、寒々とした気持ち」ともなるような姿になった時、渴いた土が水を求めるように、生气あふれる「いのち」につなが

りたいと願うのは、自然なことでもあるだろう。あるいは「いのち」というものが、あのような言葉を生んだということはないだろうか。

4 汲めども尽きぬ語り

ここで冒頭に述べた80代女性の語り（以下、Aさんとする）を挙げたい。これは、自然に語られる言葉から、日々の思いや揺れを微細に感じとる中で、「老い」の意味を「見出す」というより、その在り様から「にじみ出る意味」を探ろうとしたものである。

本稿の冒頭でも述べた通り、Aさんは、筆者が最初にお訪ねした時、ご主人を亡くされて半年あまりたったところで、一人暮らしをされていた。以後、月に一度自宅を訪問する中で、Aさんは溢れるばかりの語りをされ、ある時は「私の人生なんかでいいんですか？そう？気に入ってくれて嬉しいわ。私の人生、全部お話します」とも言われた。「人生を全部話す」と言われた、その源泉は何であったのだろうか。また夢中に語られた後、時に「私の話なんてこんな昔話ばかりですよ」と言われたが、筆者はそれを「昔話」とは感じていなかった。それは何によっていたのだろうか？Aさんの語りは、何によって生み出されていたのだろうか。

（1）Aさんの「語り」——その一回目

〈ご主人は最期までこの家で？〉ええ、それがそのつもりだったんですが。

（Aさんご自身が手術を受けることになり、それにともなってお主人も入院。そこで食が細くなり、細かく切ったものから練ったもの、流動食になり、それを詰まらせて肺炎になられたとのこと。手術を終えて、Aさんがご主人の入院先に行かれると）「お母さん、お母さん」って私のことずっと呼んで、先生が「そりゃあ、かわいそうだった」って。もう娘や息子が行っても返事なくて。でも私が行ったら「おうおうおう来たか」って言うんですよ。「お父さん、今は（術後で）お腹が完全にくっついてないけれど、それがついたら一緒に帰ろうねえ」「おう、お前も頑張れよ。おれも頑張るからなあ」

（ご主人最期の時。）ずっと私の顔を見てるんですね、見えてるんでしょうかね、どうなのかしら。先生に「目は見えてるんでしょうか」って伺ったら「さあ……」って言われたんですけど、私がちょっと動いても目で追うんです。「耳は最後まで聞こえてるから」って言われましたので、ずっと「お父さん、お父さん」って声をかけて。そのうち心電図がまっすぐになって。でもそれからまだ1時間ほどは。全然苦しまずに逝きました。看護師さん達がそりゃあよくして下さい。15分おきに「様子はどうか」って来られて。「ああ、やっぱりいくら家族が頑張っても、こういうことはプロの方でないと出来ないわ」って思いました。

（認知症介護の日々）本当にそんな人じゃなかったんですが。静かな人でね、どっちかっていうと私の方がわあわあ言う方で、主人は「ああ、また始まったな」っていう感じで。それが「ああ、人ってこ

んなにはほんのちよつとどこか詰まっただけで、こんなになるのか」ってね。小さい子ども育てる時でもね、こっちが何か教えるっていうよりも、自然と出来るようになっていくのを、支えるっていうことでしょう。ある日、足をこうやって。そんなの教えたわけでもないのにね。そうやっては尻餅ついて。それで立てるようになると、今度は一歩踏みだそうとする。それ見て家中が騒いでね。「うわあすごい。一おつ」って言う、今度は次の足。「うわあ、二あつ」で、三歩。うちの子は右（足）からだった。それが人の自然でね。で、年とると今度はだんだん……

（遺書を書かれた時）物書きする人でしたからね、筆の手つきで、ぴっと止めたりするんですね。でもそれが（筆先を紙に）置いてるつもりなのに、届かない（で宙にある）のよね。遺書の「遺」は、こんな大きくて、「書」はほんとに小さいの。それで中の文章は文字が重なってる。で、最後の「右、件の如し」っていうのは読めるのよね。「お父さん、何書いてるの」って聞いたら「君にだ」って言うんだけれど。

寝かせてなんてくれない。だんだん夜が明けてきて4時になったから、「もういいわ」って起きだすと、それから寝てしまう。「お父さん、お風呂ちよつと入ってきますね」って入ると、すぐにそこのドアをドンドン叩く。何かと思ったら「おしっこ」って。「お父さん、さっき行ったじゃない」って言っても、チューブですからやれば少しは出るんですね……そんなに我がまま言ってるのに「もうお前とは縁を切る。Aの姓を名乗るな」なんて言われて。そんな時は庭の草引きながら泣いてましたよ。それなのに、看護師さんが来られると、もうにっこにっこして。「あらあ、いい笑顔されてる」なんて言われて。だから家族がっていうのはあるんですね。

介護の話をするんですしたか。介護の話なんていい加減なものです、こんなんでもよかったでしょうか。今の心境はね、これだけは言わせてもらいますよ。若い時は将来の夢とかが色々ありますでしょ。それが今はないから、自由ですよ。そりゃあ寂しさはありますよ。でも余裕がある。「私こんなに幸せでいいのかしら」って思いますよ。他の方もみんなそうじゃないかしら。

筆者の最初の一言を皮切りに、Aさんは流れるように語られた。ご主人の病床の日々の語りに、事実や真実の重みを感じてじっと聴き入りつつ筆者が魅せられたのは、その語りが自在に「転調」することであった。その片鱗を、介護の話から我が子の歩き始めの話へひらりと変わった箇所に見ることができる。これは一つには脳血管性認知症による人格の変化という厳しい現実、命の芽生えという光を添えたいという心の動きと考えられる。と同時に、Aさんが人の始まりと終りを、その胸中に抱いている様子をうかがうこともできよう。

しかもこの「歩き始め」のエピソードは実に鮮やかであった。この一時、Aさんはまるで1歳児の母親の如く、少し前屈みになって、我が子が目の前にいるかのように、そこに眼差しを向けて「うわあ、一おつ」と手を叩かれた。筆者も「家中の騒ぎ」とキラキラした最初の歩みを感じながら、そこにいた。ここで歩き始めが「右からだった」という言葉が発せられていることにも

目を留めたい。極めて具体的な言葉に、紛れもないAさんの固有の時がうかがわれる。Aさんが「わあわあ」言い、ご主人が「また始まったな」と言われたという背後には、数え切れぬほどのそうしたやりとりがあったに違いない。その一つひとつの思いの重なりがあり、それらへ開かれていることが、語りが語りを呼んだ所以とも考えられる。

この後、Aさんの語りは、弾んだ感じで身振り手振りを伴い、行きつ戻りつ、実に多岐に渡った。しかもその一つひとつが明確な形をもちつつ、全体として「ひとつの語り」となっていた。語りが語りを呼ぶ様と、その一言ひとことの背後にある人生を感じて、それを生かすには、できるだけ生の語りとその流れ方に語らせることが必要である。よって以下では、その後、半年あまりの経過を辿るのではなく、筆者の心に最も響き、現に一番多く語られた、ご夫婦のことを中心に、筆者が感じていた「語りの流れ方」に倣って、「ひとつの語り」にしたものを示す。結婚60年にもなるという歳月は、Aさんの来し方への深い思いがこもるところであり、またその夫を亡くした「今」とが、濃密に交わるところでもあると考えるからである。

(2) Aさんの「語り」——主に夫婦のこと

新婚の「蜜のような時間」なんて、あんなの嘘ですよ。最初っから、相手の性格から何から何で分かるもんですか。必死になって働いて、子ども育てて、あんまりしゃべる暇もない。主人の仕事も休みなしでしたし。でも60からでしたね。もうお互いのことはよく分かっているし、遠慮もいらない。〇〇から帰ってきて、私がつまらんことで文句言ったことがあったんですよ。そしたら主人に「せっかくこれからは二人の時間になったのに」って言われてドキッとしました。「ああ、そんなふうに思ってくれてたのか」って。それからですね、本当の夫婦の時間っていうのは。主人は漢詩が好きでね、教えてもらいました。昔は「知らない」っていうのが恥ずかしかったけど、もうそんなの気にならない。中国の旅行でも本当に楽しかった。

この頃、時々夢に出てくるんですよ。今朝も。病氣してからの姿じゃなくて若い頃なのよね。私も若くなってるのかしら。うちの主人は足を組まない人なんです。よく男の方は足を組まれるじゃないですか。でも柔道してたから、こう足をきちんとして、そこに座ってる。「ああ、お父さん」って言って、自分の声で目が覚めるの。顔はおかしな顔なんです。自分でも鏡みてそう言ってました。でも、戦争中〇〇でちょっと会った時、空襲で、私を防空壕まで連れてってくれて「ここで待ってろ」って言われた時——のろけになりますけど——「ああ、なんていい男なんだろう」って思いましたよ。あはははは。昨日もバスに乗ったらね、男の人に傘が当たったんで「すみません」って言って顔みたら、おじいさんで、もう全然魅力がないの。「ああ、うちのお父さんの方がずっといいわ」なんて。

歳とると、私なんかでもそうだけど、男だか女だか分からなくなってくるのよね。兄を見舞いに行った時も、「もう、会いになんて行かなきゃよかった」って思いましたよ。だって昔の面影なんて全然ないんだもの。男前だったんですよ。それこそ「お嫁さんにしてほしい」ってみんなが寄ってくるくらい。鼻筋

も通ってて、目もぴっとして。それがねえ、もうほんっとに変になって。

話が全然変わりますけどね。「小股が切れる」って言葉知ってる？そう？最近の人はもう使わないのね。「美人で粋」っていうことなのよ。それでね、「私は昔『小股が切れる』って言われたことがあるのよ」ってヘルパーさんに言ったら、口あんぐりしてるの、あはは。言葉に困っちゃったんでしょね。私の花嫁衣装はね、母が「後でまた使えるように」って、白無垢に白綿帽子で、全部白だったのよ。その着付けをしてくれた人がね、「あらあ、小股が切れて」って言われたのよね。

戸籍、あれはむごいですよ、主人も息子たちも抜けて、私一人ですからね。あれ、私が死んだらどうなるんでしょね？でも、膳本は違いますね。

今の人はみんな晩婚ね。恋愛なんてしないのかしら。私たちの頃はね、男女別々でしょ。運動会の時なんて塀をよじ登って見ようとしたりして。見えやしないのに。(私の)友達なんて家に遊びに来ると、兄たちが2階にいるっていうだけでソワソワしてね、あはは。この間ね、弟が同窓会行った先で、友達に「僕は君の姉さんがずっと好きだった」って言われたんですって。あらあ、もうこんなおばあさんなのに。私、全然そんなこと知らなかったわ。藤村の「初恋」みたいなものですね。みんな絶対そんなこと口に出したりしないから。

男と女は違いますね。男はね、体が違う。違うのよ。私、今になって思うもの。武者小路実篤なんてね、「美しい村」なんて作って、理想的なように思ってたのに、違ったのね。奥さんや子どもがいくら大事でも、もう一つあるのよね。今になって「ああ、あの時は騙されてたな」って思うことがあるんですよ。やっぱり素晴らしい人だったら、そっちに行ったらかもしれませんけど、秤にかけてみて、ちょっとこっちの方が重かったんでしょね。何か格好からしてお洒落してた時があったんですよ。その時は「あらあ、お父さん素敵なの着てる」って思ってたんですけど。女の方は、子ども育てたりするので精一杯なのに、男の方は違うのよね、うん。そんな目で見るとね、万葉（集）習ってても「ああ、この先生だってどうだかわからないわ」なんて思ったり。

うちの嫁はね、私の息子だって思うからか、絶対悪口を言いませんね。この間海外旅行に行った時でも「〇〇さん、英語べらべらですごいのよ」なんて。でも私が「主人の墓に入るのやめようかしら」なんて言うと「私も!」ですって。それだから夫婦なんて、本当に分かりませんよね。そんなん言っても、一緒に墓に入るんだから。

この前ね、お供えにもする塩昆布、2〜3日とろ火で煮てたんですよ。それがね、それ煮ながら、そっちの部屋で何かしてたら、心臓がきゅうってしてきて。いくらとろ火でも、そのまま私が意識失って倒れたら、危ないじゃないですか。もう、いつどこで尽きたって、それは構わないんですよ。ただね、火事だして死んだってんじや、みっともないじゃないですか。それを思っ（倒れながら）もう泣きましたよ、ほんとに。それ話したらヘルパーさんが、「もう1日来る日を増やしましょうか」って言って下さったけど。でもね、それだって、それまでの何日かは倒れたまゐりなきやなんないですものねえ。もう塩昆布も煮れないわねえ。ハハ、塩昆布。

もう、今は寂しくなんかいいですよ。さっきのその「塩昆布」の時は困りましたけど。だからもうしばらくはいますよ。お父さん「ダメだ」って言うかしら？そんなことないわよね。

（３）「汲めども尽きぬ」と「尽きせぬ思い」、**「余裕がある」**

Aさんは「もういつどこで尽きたっていい」と言われたが、だからこそ「尽きせぬ」思いがほとばしり、「語り尽くそう」とされるのか。幼い頃から今に至るまでの様々な時や、幾人もの周囲の人の人生を掌中におさめて自分の語りとされ、一つの語りに別の語りが胚胎する様に、筆者は「汲めども尽きぬ」豊かさを感じてきた。あるいは豊かであるからこそ、「尽きせぬ」思いは募り、その愛惜の念が「汲めども尽きぬ」語りを生み出すのか。「汲めども尽きぬ」と「尽きせぬ思い」が互いに呼び合って、語りが紡がれているように思われた。

この二つのモチーフは、「語り」の中で交互に表れた。それは、「歳とると男だか女だか分からなくなる」と語られた後、「小股が切れる」と言われた話をされ、次いで没後は痕跡が分からなくなる戸籍の「むごさ」のことから、藤村の「初恋」にも似た話へと転調していったことにうかがえる。「男だか女だか分からなくなる」からこそ、どこまでも男であり女である話題が生じるのか、「小股が切れる」話には華やぎがある。回想には、「現在の生を生き返らせる『生きられた時間』の回想」（矢野 2000：276）がある。Aさんも語られることで、その時に「なって」、生きる力を汲み取っておられるように思われた。と同時に、汲み取るゆえに、というよりも、そのひらりひらりと語りから語りへ転調されること自体にも、筆者は生きるエネルギーを感じていた。

時を惜しむ感もありながら、Aさんには「余裕があ」った。それを殊に感じさせられたのが、「塩昆布」の一件である。元気にしていても、いつ何が起きるかは分らない。これは常にある覚悟に違いなく、また独りの暮しを浮き彫りにしてみせた出来事であった。にもかかわらず、それが起ったのは、塩昆布を煮ている時であった。事なきをえたからこそ言えることではあるが、この取り合わせは、どこかおかしくもある。もとよりこれはAさんがアレンジされたことではない。が、そういう「ユーモラス」な状況が起るところに、Aさんの現在の「在り様」が表れているように、筆者には思われた。

さて、先の矢野（2000：276）の指摘は、幼年時代の思い出に、「存在まで深化し、そこから聖なる次元をとりもどす働き」をみたもので、Aさんとは様相を異にすると考えられる。Aさんの場合、主なテーマはご夫婦のことにあった。

（４）「重低音」と「相聞歌」、**「男は違う」**

ご主人に「どんなになっても生きてほしい」との願いは、亡くしてなお、今のAさんの想いである。しかし、自身が入院を余儀なくされた時、「案外ホッとした」とも告白された。けれど

この辛い認識が、夫への思いを損ねるものでもない。このいわば「重低音」も響きつつ、ご主人への限りない愛着は、語りの随所に表れた。「うちの主人は足を組まない人なんです」の一言にも、長年その起き伏しを共にしてきた人に寄せる眼差しが感じられる。また病院で「お母さん、お母さん」と呼び続け、ずっとAさんを目で追われ、遺書を「君にだ」と書かれたご主人の姿を話されるAさんの語りには、夫婦が互いに互いを呼び合う声が聞こえてくる。それでいて、Aさんはこのいわば「相聞歌」を笑ってもみせられた。戦争時の「のろけ」話に「あはははは」と笑われたのは、当時の姿を眺めてというだけでなく、今それに重ねて「のろけ」るご自分をも、笑われたのではないだろうか。

中でも印象深かったのは、「男は違う」と言われた話である。Aさんは「お父さんでなければ分らないことがいっぱいあるのに」と、何のてらいもなく二人だけで通じ合える「本当の夫婦の時間」を知る人である。それが独りになられた今、真に夫と交わりたい、ひとつになりたいという想いがその身に湧きあがったのではないか。その時、突き当たったのが、「体が違う、違うのよ」だったのではないかと推察する。

この「違う」は、何度となく言われた、結婚が思い描いていた夢と「もう全然違う」というトーンに通じるものがあつた。それは相手への恨み妬みというよりも、分からなかったことの悔しさ、私は一体何だったのかしらという思いから、「今になって思う」という発見を伴う新鮮さへ、そして為しえなかったもの、別の人生を想ってみることへと連なっているように思われた。夫をこよなく想う気持ちが、乙女の頃の夢を呼び覚まし、それがまた「そんなん言っても同じ墓に入る」に還ってくる。「違う」の一語は、華やきのニュアンスを伴いつつ、言葉として発せられたその瞬間、今はじめて思う何かになった、と筆者は捉えた。

5 老いが「みずみずしい」時

Aさんの語りについて、本稿冒頭で述べた大学院生からは、ご主人の死を「受容」している語りであるとか、いや「受容」する途中の語りではないかという感想もあり、語りながら「整理」されているのではないかという声もあった。高齢者が自分の歩んだ人生を振り返り、整理し、その意味を模索しようとするのは、自然で普遍的な過程であり、高齢者を対象とした「回想法」では、共感的・受容的姿勢で意図的に介入することで、心理的安定やE.H.Eriksonが老年期の課題とした「人生の統合」が達成できる可能性が開かれるとされている（黒川 2005：23）。しかし、人生とは果たして「整理」しされるものだろうか。

Aさんの語りは、人生を共に紡がなければ得られなかったであろう夫への情愛が強く感じられた。それは、夫が今も生きていたら、語られはしなかったものだろう。しかし、Aさんは夫への愛着も、夫を亡くした寂しさも、当然あるものとして、それを生きておられたように思われる。

また、死の影がよぎれば、語りを転調させていかれたが、死は厳然としてあるものと、見据えておられたように思われた。

見据えるということは、受け容れていなければ出来ない。しかし、見据えるからこそ、あるいはそこに浸るからこそ、つきあげ、湧きあがってくるものがあることを、Aさんの語りは示していた。Aさんの語りの「汲めども尽きない」という印象は、まさに「みずみずしさ」に通じる「水」のイメージでもある。老いの「みずみずしさ」は、人生を通して培われてきた大切なものの喪失や死を見据えつつ、なお生きようとする中で表れるものではないか。生と死が濃密に重なる中を生きることは、「いのち」の営み²⁾ そのものとも言えるだろう。その語りがみずみずしいのは、当然と言えば当然であったのかもしれない。

中村（1987：81）は、「老いによる生命力の衰退を前提とした受容と、生のあるかぎり生命力を強く保持すること、この二つは必ずしも矛盾せず——ある意味では矛盾しても——重なり合って進行しうる」と述べている。

若い時は、意識せずとも、自らの「いのち」をそのまま生きており、その姿が新鮮で美しい。それに対して「老い」のみずみずしさは、人生の重みと死の切実さが相寄る中でこそ生じるものである。それは「老い」に内在し、「老い」に溶け合う形で生まれてくるものと言えるだろう。その時その時の「いのち」につながっている時、「今」の人生を抱きしめつつ、それを自然に「超えて」いるところもあるのではないだろうか。「老いの『みずみずしさ』」とは逆説的で不思議な表現に思えるが、これも老いの一つの真実であり、一つの捉え方として、意義があるものと考えられる。

注

- 1) 筆者は普段、人から自分の歯について殊更何か言われることはないので、高齢者から歯を求められるのは不思議な気がした。入れ歯とは不自由なものと聞かすが、身体の不自由さは歯に限るものでもないだろう。しかし例えば、古代人は「歯の健康状態に重きをおき、また、歯をもって一生の生命の指標としていた」（長谷川 1993：192-193）とされ、俗に「髪は女の命」とも言われる。また歯型はその人を同定する時に用いられ、形見の一つには遺髪がある。これらについては、より詳細な検討が必要であるが、筆者が出会った高齢者が特に歯や髪という部位を求められたのは、無意識にせよ、由縁のないことではないように思われた。
- 2) 心理臨床家の竹村（2011）は、臨床家としての自らのありようを「いのちの営みに添う」と表現し、人が行き詰った時とは「自分の身の内にあるかけがえのないいのちの生かし方の声を聴いてみる大切な機会」とであるとしている。また、母の胎内に生を得た時から常にある「いのちの根底で『私』を支えて生かそうとする原初のいのち」を感じ取ることの心強さを述べているが、老いというものはまさにこの「原初のいのちの営み」を強く感じさせてくれ

るものであることを、Aさんの語りは示していたと思われる。

文 献

長谷川正康 1993 『菌の風俗史』時空出版.

辺見庸 1998 「解説」村田喜代子『蕨野行』文春文庫, 226-236.

井上勝也 1998 『老人の心理と援助』メヂカルフレンド社.

石牟礼道子 1995 「名残りの世」吉本隆明・桶谷秀昭・石牟礼道子『親鸞』平凡社ライブラリー, 129-182.

春日武彦 2011 『老いへの不安 年を取り損ねる人たち』朝日新聞出版.

河合隼雄 1997 『『老いる』とはどういうことか』講談社+α文庫.

黒川由紀子 2005 『回想法—高齢者の心理療法』誠心書房.

村田喜代子 1994 『蕨野行』文藝春秋.

中畠康之・小田利勝 2003 「サクセスフル・エイジングのもう一つの観点—ジェロトランセンデンス理論の考察—」神戸大学発達科学部研究紀要 8 (2), 303-317.

中村雄二郎 1987 「老いと生のパラドックス—子供・女性との対比で」伊藤光晴・河合隼雄・副田義也・鶴見俊輔・日野原重明編『老いの発見3 老いの思想』岩波書店, 60-81.

小田利勝 1993 「サクセスフル・エイジングに関する概念的考察と研究課題」徳島大学社会科学研究第6号, 127-139.

佐藤眞一 2014 「老いのところと高齢社会」佐藤眞一・高山緑・増本康平『老いのところ 加齢と成熟の発達心理学』有斐閣アルマ, 3-20.

佐藤眞一 2014 「引退するところ」佐藤眞一・高山緑・増本康平『老いのところ 加齢と成熟の発達心理学』有斐閣アルマ, 41-61.

進藤貴子 1998 「解説」山中康裕『老いの魂学』ちくま学芸文庫, 289-299.

進藤貴子 2010 「高齢者福祉と高齢者心理学」川崎医療福祉学会誌増刊号, 29-44.

多田富雄 1987 「老化と免疫系—スーパー人間の崩壊」多田富雄・今村仁司編『老いの様式』, 76-100.

竹村洋子 2011 『いのちの営みに沿う心理臨床 人が出会い、共に生きるということ』創元社.

鷺田清一 2007 『思考のエシックス—反・方法主義論』ナカニシヤ出版.

山中康裕 2002 「高齢者臨床におけるコア」臨床心理学 Vol.2(4), 441-446.

矢野智司 2000 「生成する自己はどのように物語るか」やまだようこ編『人生を物語る』ミネルヴァ書房, 255-278.

An Attempt to Consider “A Fresh and New-born” Old Age

Miho KUBOTA

Recently, great many studies have been carried out on successful aging and productive aging, and our society still persists in myth of youth, “the younger, the better,” which makes it difficult for people to accept getting old. In this paper, by listening sincerely to pieces of words from elderly women and the narrative of a woman in her eighties, it is considered how getting old is paradoxically fresh, neither staying young nor just getting mature. It is because of having lived for a long time and realizing death nearby, that such people were bursting with wish to live, while taking losses for granted. It also proved that old age is not a goal but a process in life. The title of this paper, “*A Fresh and new-born*” *Old Age*, may sound strange and unlikely, but it can be a true and inspiring viewpoint about aging.

Keywords: paradox of aging, myth of youth, workings of life